

博物館休館日カレンダー 2023年 12月													
日	月	火	水	木	金	土							
26	27	28	29	30	1	2							
3	4	5	6	7	8	9							
10	11	12	13	14	15	16							
17	18	19	20	21	22	23							
24	25	26	27	28	29	30							
31	1	2	3	4	5	6							

休館日 ※情報はR5.11.18現在

みやこ町歴史民俗博物館

博物館だより

No.205



令和5年12月1日

みやこ町歴史民俗博物館発行
福岡県京都郡みやこ町豊津1122-13
TEL 0930-33-4666
FAX 0930-33-4667

◆博物館NEWS

ふるさと遺産フエタルボの歴史たんけんウォーク
反戦・ハンセン文学の拠点豊津散策

10月22日(日)、博物館を会場に「みやこ町ふるさと遺産フエタルボ」が開催され、午前中は、テーマを取り上げた堺利彦・葉山嘉樹ゆかりの地を歩く「歴史たんけんウォーク」が行われました。

二人が学んだ育徳館周辺には、彼らの著作でも紹介されたゆかりの地や施設が今も息づいていて、一人の足跡をたどることができました。



▲見学地の一つ堺利彦農民労働学校跡

◆講座・教室・催し物ガイド 12月の歴史講座

【漢詩紀行講座】
12月2日(土) 9時30分～

【古文書講座】
12月9日(土) 10時～

【古典かな講座】
12月16日(土) 9時30分～

【みやこ学講座】
12月23日(土) 10時～

※日程等変更となる場合があります。
※見学会等は別途通知します。



▲山泉進先生による文化講演「堺利彦と現代」

ふるさと遺産フエタルボの歴史文化カレッジ
堺利彦と葉山嘉樹をテーマに講演会

午後は歴史文化カレッジが開かれ、堺利彦をテーマとした講演会と、葉山嘉樹の「里帰り資料」速報展が行われました。

講演会では堺利彦の顕彰・研究を続けている塚本領氏(三人顕彰会)・山泉進氏(明治大学名誉教授)から、世界が流動化する現在、堺が主張した非戦論はいささかも色褪せていないとの談話が披露されました。

年末臨時休館のお知らせ

博物館では館内整理と燻蒸作業のため、臨時休館します。期間中の博物館および文化財業務に関することは、左記へお問合せ下さい。なお、新年は1月4日(木)から開館いたします。

・臨時休館の期間
12月24日(日)～12月28日(木)

※なお、12月29日は年末年始休館です

・臨時休館中の問合せ先
☎ 33-1040(図書館)

絵画コンクール 最優秀賞受賞者決定!

例年、町内外の小・中学生の児童・生徒を対象に実施している「わたしの町の過去・現在・未来絵画コンクール」ですが、今年も一〇五一点の応募をいただきました。審査員による厳正な審査の結果、選ばれた優秀賞6点を10月1日から博物館ホールに展示し、入館者による投票を行った結果、育徳館中学校3年生の平野心乃莉さんが描いた「古代の山城 御所ヶ谷神籠石」が最優秀賞に輝きました。おめでとうございませう!



▲絵画コンクール最優秀賞受賞者 平野心乃莉さん



▲来館者による投票の様子

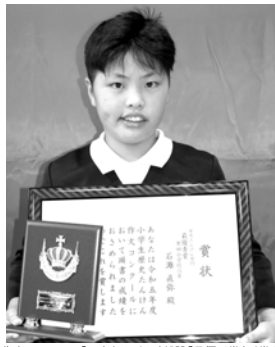


▲最優秀賞受賞作品「古代の山城 御所ヶ谷神籠石」

「小学生歴史たんけん作文コンクール」最優秀賞受賞者決定！

例年、町内外の小学生の児童を対象に実施している「小学生歴史たんけん作文コンクール」では、力作揃いの作品の中、「歴史たんけん」部門では、みやこ町立黒田小学校6年生の石灘直弥さんの「彦山豊前坊と求菩提山次郎坊」、「吉田兄弟物語」部門では、みやこ町立豊津小学校6年生の内野優愛さんの「私のイチオシ『吉田兄弟物語』」が見事、最優秀賞に輝きました。

おめでとうございます！



作文コンクール「歴史たんけん」部門「最優秀賞」受賞者
石灘直弥さん(みやこ町立 黒田小学校6年生)

作文コンクール「歴史たんけん」部門「最優秀賞」受賞作品

彦山豊前坊と求菩提山次郎坊

黒田小学校 六年 石灘 直弥

舒明天皇九年二月(六三七)年、東から西へ大きな音をたてて流星が流れた。その音の人々は「流星の音だ」とか「地雷の音だ」とか言ったが、唐から帰国した僧の曼が流星ではない。これは天狗である。天狗の吠える声が雷に似ているだけだ。」と言った。これは、日本で初めて天狗が「本書紀」に登場した場面だ。ここでは天狗を「てんぐ」ではなく「あまつきつね」と読んでいる。天狗は中国から伝わった。元々、中国では流星を意味するものだったが、天を駆ける犬の姿に見えて、天の狗とされた。僕は、この天狗が近くに祀られていると知って会いに行きた。そして天狗がいる場所が近くにあると知ってわくわくした。

ひとつめは、英彦山にある高住神社だ。ここには日本八天狗の一人、彦山豊前坊が祀られている。日本八天狗とは、江戸時代中期に書かれた「天狗経」に登場する、強い力を持つ四十八天狗の中でも、さらに強い力、神通力を持つ八人の天狗のことである。天狗は霊山に住んでいるので、山の名前と二緒になっている。京都府の愛宕山太郎坊、京都府の鞍馬山僧正坊、滋賀県の比良山治郎坊、長野県の飯綱三郎、神奈川県相模大の伯耆坊、奈良県の大峰前鬼坊、香川県白峰相模坊、そして福岡英彦山に住む彦山豊前坊のことである。天狗は三種類あつて鼻の高い「鼻高天狗」と、くちばしのある「カラス天狗」で、鼻高天狗は八天狗、カラス天狗は小天狗と言われる。彦山豊前坊は英彦山の高住神社に着くと、まず、天狗杉と書かれた大きな杉の木があつた。とても太くて上を見上げると、どんな大きな天狗でもとまれそうだった。神社の境内の中を見ると、正面に大きな天狗の面が三つ、神棚につく側面にもいくつかあつた。どの天狗の面も、この世のすみずみまで見通せそうな、大きく見開いた目と、長い鼻と、一文字に結んだ口で、こつちをならみつけていた。僕は彦山豊前坊に会えたように、社務所の

「それが彦山豊前坊ですか？」

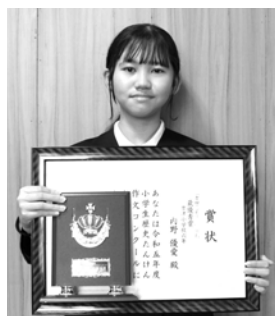
と、聞いた。社務所の方は

「全部が彦山豊前坊を表しているよ。」

と、答えてくれた。石碑に彦山豊前坊の説明があり、欲深く、おこり狂った人には、子供をさらう深く、家に火を付けたりして、慈悲の鉄槌を下し心正し人には、願い事を遂げその身を守る」とあつた。また、彦山豊前坊は九州の天狗の棟梁格で、霊力が強く、天狗倒しという霊力を使い、その力とは、山奥で深夜に突然さまじい大きな音をたすことだ。英彦山では、この天狗倒しがよく起き、彦山豊前坊の霊力のあらわれとされている。彦山豊前坊の次に僕は彦山豊前坊の求菩提山次郎坊へ行った。求菩提山は次郎坊と呼ばれるカラス天狗が住んでいるそうだ。昔は次郎坊天狗

社という神社もあつたそうだ。資料館では、天狗と山伏との結びつきを感じた。山伏は超自然的な力「験力」を手に入れるために修行していた人たちで、里の人々には、すごい力を持つ山伏と天狗が重なって見えた。だから天狗は山伏の格好をしているのだ。その他にも僕は、求菩提山に伝わる神仏像や出土した物を見て、山伏の暮らしを知ることができた。

僕はこの二つの場所に行つて、今まで空想上の妖怪だと思つていた天狗が、神様として人々に信じられていたことを知った。そして悪い事も良い事もする天狗を面白く思った。英彦山も求菩提山も山伏が修行していた山だと知つて、これから山から近くに住んでいる僕達の頭の上を妖怪であり神様でもある彦山豊前坊や次郎坊が飛んできると想像すると、心正しくしておこうと思う。



作文コンクール「吉田兄弟物語」部門「最優秀賞」受賞者
内野優愛さん(みやこ町立 豊津小学校6年生)

作文コンクール「吉田兄弟物語」部門「最優秀賞」受賞作品

私のイチオシ「吉田兄弟物語」

豊津小学校 六年 内野 優愛
「お母さん、お父さん、みやこ町にはたくさん偉人の父兄さんだ。今、私達が快適に暮らしているのは、私達のために努力をしてくれた昔の人たちのおかげなんだよ」

わたしは、夢中になってお母さんとお父さんに吉田兄弟のことについて話していました。みやこ町の人によって作られた二冊の本、「吉田兄弟物語」との出会いは、私の考え方が大きく変わるきっかけになりました。そうでなければ、きつと私は夢中になって吉田兄弟のことにつ

いて両親に話すようなことはしていません。そんな「吉田兄弟物語」という本の内容について紹介します。

この本は吉田健作さんと増蔵さんというみやこ町出身の兄弟が、どんな人生を送ってきたかというこについて漫画で書かれています。昔のことが書かれています。とても読みやすいです。

私が特に心に残っている場面は、兄の健作さんが進んだ技術を学ぶためにフランスへ行き、そこでたくさん苦勞をする場面です。朝から夕方まで働き、ほとんど徹夜で仕事のことやフランス語の勉強に打ちこみ続ける日々が続き、絶対につかつたと思います。それでも、あきらめないで一生懸命に取り組んでいたところがすごいと思いました。私だつたら、すぐにあきらめていたと思います。吉田健作さんは、国のため、人々のためにということを常に考えていたから、努力し続けることができたんだと思います。自分のことよりも、周りの人のことを大切にする姿勢にあらがれます。

明治十九年十一月二十一日、健作さんが三十五歳のとき、今までがんばった成果が形として現れる日がやってきました。ずっと作りたかった工場がいに日本に完成したのです。この工場は、西洋文化を象徴するレンガ作りの巨大煙突が天をつく、滋賀県最大規模をはこるものでした。この工場をきっかけに全国各地にもたくさん工場の造られていくことになりました。健作さんにとつてこれほどうれしきことはなかったと思います。しかし、健作さんは持病のぜん息の悪化もあり、四十五さいという若さで生涯を閉じることになります。短い人生だとは思いますが、健作さんのたくましく生きる姿は、とてもかっこいいと思います。健作さんの生けん命な姿は、弟の増蔵さんにも大きな力を与えていたのではないかと思います。

健作さんの弟、吉田増蔵さんもみやこ町の偉人としてとても有名です。増蔵さんは「昭和」という日本の元号を考えた人です。漢文や漢詩を生けん命学んでいた増蔵さんはある時、森岡外先生から声をかけられ、一緒に元号を考えようという依頼を受けることになりました。しかし、道半ばで森岡外先生は体調をくずし、ずっと寝たきりになってしまいました。このまま元号を考えるのは難しいという空気がたよう中で、増蔵さんは

「元々元号を作つてみせます。」と、宣言します。この言葉を聞いて森岡外先生は、どんなに心強かつたことだろうと思います。元号を考えるという仕事をしている中、増蔵さんにはもう一つの依頼がとびこんで来ます。それは「天皇陛下の称号を考案してくれないか」というものでした。どちらも大変な作業です。それでも、増蔵さんは元号と称号どちらの仕事にも全力で取り組むという選たくをします。どちらでもしかりとこなすことができたということが本当にすごいと思います。私だつたら、どちらでも手付かずになつたり、混乱してミスが出てしまつたりすると思います。こんなに重要な仕事を頼まれるということは、増蔵さんがたくさんの人たちから信頼されているからだと思います。健作さんと同じように増蔵さんも、自分のことだけでなく、周りの人々のためや国のために自分ができることを生けん命やりとげたというところが兄弟で似ていると思いました。

みやこ町出身の偉人、吉田健作さんと増蔵さんについて書かれた「吉田兄弟物語」の本を読む前と読んだ後で、私自身の考え方が大きく変わったなと思います。この本を読む前は、毎日快適に暮らしていることは、当たり前のことだと思つていました。でも、この本を読んだ後は、決して当たり前のことではなく、周りで支えてくれている人がたくさんいるからだと思ふようになりました。そして、私自身もだれかを支えることができよう人にならなうと思ふようになりました。「吉田兄弟物語」は、そんなきっかけを私に作ってくれました。みやこ町に住んでいる人だけでなく、たくさんの人に読んでもらいたい、おすすめの本です。ぜひ、みなさんも読んでみてください。